

## 山田昌弘『迷走する家族』2005年

### 1、著者について

#### ①略歴

1957年 東京都に生まれる

1981年 東京大学文学部卒業

1983年 同大学院社会学研究科修士課程修了

1986年 同博士課程単位取得退学 東京学芸大学社会学研究室助手、専任講師、助教授、  
教授を歴任

2008年4月より 中央大学文学部教授

#### ②最初の著作『近代家族のゆくえ』を出版するまで

- ・専攻は家族社会学
- ・パーソンズの機能構造主義「家族の機能は～である」という議論に困惑する。本書でも、パーソンズの家族機能縮小論が「家族の本質回帰」に依拠しているように、家族に本質的機能があるという議論には限界があると指摘している(p50)。
- ・アリエス『<子供>の誕生』が1980年に出版され感銘を受ける
- ・クリストファー・ラッシュ『ナルシシズムの時代』、アリー・ホックシールド『管理される心ー感情が商品になるとき』やスウィドラー『心の習慣ーアメリカ個人主義のゆくえ』などアメリカでの感情社会学の存在を知る。
- ・「<子供への愛情>などの社会史のテーマを、感情社会学のツールで読み解く」というアイデアを得る→「感情」は「社会」に構築されたものでもあり「社会」を構築するものでもあるという立場から、「感情」がどのようにして形成されているのかを読み解くという方法論？

#### ③主著とそれらの要点

1994 『近代家族のゆくえ 家族と愛情のパラドックス』新曜社

- ・「愛情をあおる装置」としての家族
- ・理想の家族像（子どもは愛を注ぐ対象・愛情が高まって結婚する）が、「愛への疑い」「家族愛（母性愛）」を生み、それらが逆説的に結婚年齢の上昇・出生率の低下を招いているという視点

「家族社会学の目的は、家族をありえない幸せな状態にすることではなくて、つらい家族の状況に耐える強さを可能にさせることである (p268)」

▼実態はともかく意識のうえで戦後家族モデルが一般的に規範として機能していたことを前提とした議論といえる。

1996 『結婚の社会学 未婚化・晩婚化はつづくのか』丸善ライブラリー

- ・「イベント」と「生まれ変わり」 ・ハイパーガミー（女性の上昇婚）
- ・「もっといい人があるかもしれないシンドローム」による結婚の先送り
- ・「結婚＝幸福」という意識が未婚化・晩婚化に拍車をかけている。

1999 『家族のリストラクチュアリング』新曜社

1999 『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書

- ・「パラサイト・シングル」が流行語（1997年、日本経済新聞）となる。韓国語・中国語にも訳される。
- ・「学卒後もなお親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」と定義される。
- ・20代の正社員、リッチな生活を送る人々が想定されていて、未婚化による少子化、住宅や家電製品などの基礎的消費の落ち込みにより不況が加速化するというロジック。若年層からは「若者バッシング」として批判される。

▼現在からすれば、親の経済的な豊かさが維持されていることを前提とした議論といえる。「感情」が「社会」を構築しているという側面が前面に押し出されている。

2001 『家族というリスク』勁草書房

2004 『家族ペット やすらぐ相手は、あなただけ』サンマーク出版

- ・理想の家族像の追求としての「ペットの家族化」（犬＋猫のペット数は1994年1523万匹→2005年2410万匹、未成年・子ども数は1995年2857万人→2005年2413万人）

2004 『パラサイト社会のゆくえ データで読み解く日本の家族』筑摩書房

- ・『パラサイト・シングルの時代』の寿命を意識、親と同居していても生活水準の低い層が拡大、90年代は20代正社員が主力であったが、そこにフリーター層が加わる。
- ・不安定雇用の増大と、親の世代の高齢化による負担増、本の帯には「かじれるスネはもうない…」

▼規範として機能していた理想の家族像を実現するための条件が失われ始め、「パラサイト・シングル」の議論が有効性を失う。

2004 『希望格差社会「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房

- ・「格差社会」がユークキャン流行語トップテン（2006年）に選出される。
- ・「リスク化」と「二極化」を不可避のものとみなすが、格差が固定され社会全体の活力が失われる「希望格差」を問題化する。

「若者に関しては、不安定な職を「選ばざるを得ない」状況に追い込まれている。若者の意識変化は、そのような状況に適合した結果生じたのであって、その逆ではないことを強調したい。若者の心理的安定、そして、自己正当化のためには、「好きでやっている」という言い訳が必要となるのである。（文庫版p119）」

▼若者の意識変化から社会変化を説明した90年代後半の議論から、社会的経済的変化が若者の意識変化に作用し、さらにその意識変化が社会変化に適合するという視点が強くなる。

2005 『迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣

2006 『新平等社会「希望格差」を越えて』文藝春秋

2007 『少子社会日本 もうひとつの格差のゆくえ』岩波書店

2008 『「婚活」時代』共著者：白河桃子

・「婚活」がユーキャン流行語大賞（2009年）候補 60語のうちのひとつに選ばれる。

・「自分の魅力を高めたり、積極的に出会いの機会を作るなど、結婚を目的とした活動を意識的に行なうこと」と定義される。

▼女性の上昇婚を勧めるものとして受容されたが、著者は逆に非現実的な上昇婚を望むから未婚化・晩婚化がすすむのであって、そのようなミスマッチを解消するための提案として、「婚活」を勧めているといえる。

2009 『ワーキングプア時代 底抜けセーフティネットを再構築せよ』文藝春秋

・「格差」から「貧困」へ。様々な社会保障や福祉制度が、標準世帯モデルから外れた人々のセーフティネットとして機能していない状況を描く。

2009 『若者はなぜ保守化するのか 反転する現実と願望』東洋経済新報

・若者の保守化＝安定志向（正社員志向、専業主婦志向）を、変化しない雇用システムと家庭内の性別役割分業システム、変化した雇用状況と結婚状況のギャップを象徴する傾向とみなす。「やりたいこと」を追求しても稼げないという認識が一般的になり、現実と願望が180度反転した「既得権への闘い」ともいえる状況があるという。

▼著者の問題意識の変遷をあえて分類すれば次の三つになるだろう。マジョリティにとって、戦後家族モデルが理想的な家族像として機能していた時代の著作、その規範を達成できないマイノリティの苦しみに焦点を当てる。理想的な家族モデルが崩れ始めて噴出することになった、未婚化・晩婚化・少子化という問題の原因を個々の「感情」や行動に帰する90年代後半の著作。それらの問題をグローバル化やニューエコノミーに帰する00年代の著作、「感情」は社会構造的変化に規定されたもの、またその構造を維持するものとして扱われる。

・本書（『迷走する家族』）では、家族の問題状況を、経済状況の悪化とモラルの崩壊がどのように結びついているのか、どちらかに偏ることなく考察したいとしている（p88）。

2、本書（『迷走する家族』）について

○どのような本か？

1990年以降急激に押し寄せてきたグローバル化やニューエコノミーの浸透により社会全体が流動化するなか、家族の階層化と、理想の家族像モデルが見つからない状況を「迷走する家族」と形容する。実態上でも意識上でも一定の機能を果たしてきた戦後家族モデルの形成と解体を描くことで、「迷走する家族」の現状の把握に努めた著作。あとがきにあるように、本書の原型は、外国人記者に日本家族の変遷を説明するためのパンフレットであったため、著者のそれまでの議論をわかりやすくまとめたものといえる。

## ○基本的な状況認識

「日本の高度成長期の家族は、目的(幸せになる)、目標(豊かな家族生活)、それを実現する手段(夫－サラリーマン、妻－専業主婦)が揃っており、誰でも少し「努力」さえすれば手に入る見通しがもてた幸福な時代だったのだ(p7)」

「今の日本家族の状況は、目的と目標、そして、目標とそれを実現する手段の間に「ずれ」が生じてきている点から説明できるのではないか(p9)」

- ①豊かな家族生活という目標に到達した後、「幸せな家族をつくる」ための適切な目標が見つからないという事態。代わりに呈示される目標は、万人が実現できるものではないという事態。(目的と目標のずれ)
- ②豊かな家族生活そのものが維持できない事態。豊かな家族でも将来維持できるかどうかわからないという不安が生じている事態。(目標と手段のずれ)

## 第I部 今、日本家族に起こっている問題

### ○家族を評価する方法論

#### ・水掛け論になりやすい家族論

離婚を規範からの逸脱とみるか自由とみるか、少子化を将来の労働力不足とみるか親が子どもをもたない自由とみるか、というように二項対立的な議論になりやすい。家族にかかわる現象(離婚や少子化)が人々に問題視される「社会構造的要因」「歴史的要因」を解明する。

#### ・構造機能主義による評価

機能を先験的に設定し、機能の不充足を「問題」とする。そのため、どのような機能が社会的に・個人的に期待されているかを把握することから始める。

#### ・家族評価の三つの基準

- ①「社会的機能」:「社会」がある制度に対して期待している役割。時代とともに変動。

家族の社会的機能は縮小傾向。

「家族社会学の歴史は、家族の機能は何かを巡っての論争史であったといっても過言ではない。(p19)」

現在の日本社会で家族の社会的機能といえるものは次の二つ。

- 1)子どもを生み育てる責任をもつこと ex.育児を放棄し施設に預けることが忌避される
- 2)生活リスクから家族成員を守ること ex.「親子や夫婦の相互扶助義務」

この二つの機能を果たせない家族が増えている。それが「問題」とされる。(家族のマクロ問題、社会的機能不全)

- ②「個人的機能」:個人がある制度に対して抱く期待

- 1)「家族を求める欲求」:家族という存在が欲しいという期待

→アイデンティティ欲求に関わるもの。近代社会において家族は選択不可能・解消に困難が伴う関係とされる。であるからこそ、家族は宗教や共同体に代わる「かけがいのない存在」となる。日本社会では戦前までは「イエ制度」により、戦後も比較的安定した家族を形成することができたので、「家族を求める欲求」は顕在化しなかった。

2)「家族に求める欲求」：家族に「何か」を求める期待。主観的なものであると同時に社会的に構築された(内面化された)ものでもある。そのなかでも大きく分けて次の二つがある。

a 生活上の欲求が満たされない

b 情緒的な欲求が満たされない

これらの欲求が満たされる家族とそうでない家族とで二極化する。これらの欲求を満たさない家族が「問題」とされる。(家族のミクロ問題、個人的機能不全)

③「価値意識」：ある特定のライフスタイルに対する「信仰」

a 他人の家族が理想的ライフスタイルをとっていない：「このような家族はあってはならない」

b 自分の家族が理想的ライフスタイルをとっていない：「こうでなくてはならない」

→また理想的ライフスタイルの基準を、過去にうまく機能していたモデルに置くのか、新しく登場したモデルに置くのか、という違いがある。「自分で選ぶ」理想的家族モデルを実現できる人とそうでない人と分断される。理想的家族モデルの実現が難しくなる事態が「問題」とされる。(価値観の不適合性)

「社会的機能に適合していて、個人的機能も充足され、万人に実現可能な家族モデルが存在しない(p58)」

## 第Ⅱ部 戦後家族モデルの形成と解体

夫は仕事、妻は家事・子育てを行って、豊かな家族生活をめざす「家族の戦後体制」(落合恵美子)≡「戦後家族モデル」に代わるモデル形成が進んでいない状況が現代といえる。「豊かな生活を享受しながら、素敵な相手と一緒に、自分の好きなことを追求する」という新しい家族モデル(「自己実現家族モデル」)は魅力的ではあるが、万人に実現可能なものではない。戦後家族モデルが定着していた時代を分析するため、日本家族モデルの変動をたどる。

### ○日本家族モデルの変動

#### ・前近代社会

明治時代以降に限っても、家族モデルに地方差と身分差がある。

ex.九州南部の末っ子相続、大阪商人の姉家督、上流階層の一夫多妻的な慣習など

戦前は農業・自営業に適合した直系家族規範(長子が結婚後、親夫婦と同居する原則)

が強く、戦後は核家族規範が普及したと説明されることが多いが、戦前でも数的には直系三世大家族よりも核家族が多数派だった。

・明治民法と家業共同体＝「イエ制度」

明治から戦前までの「イエ制度」という家族モデルは、国家が上から画一化した点で近代的、下から異議申し立てが許されないという点で前近代的である。明治民法にバックアップされるかたちで、長子相続・戸主権・夫婦同姓などが普及した。家業共同体は国家による近代化にフィットする形で徴税の単位・徴兵の単位として発達した。

女性の労働力率・離婚率・婚外子率(戦前 5~9%)の高さ、養子の多さ。夫婦・親子などの家族関係が不安定である代わりに、家業共同体であるイエが安定していた。

・近代社会

地方差と階層差が均一化されるに従い、家族モデルにも「同一化」の圧力がかかる。近代社会における家族モデルは、社会的機能の縮小、個人的機能の増大という傾向にある。戦後になり都市部を中心に家業共同体としてのイエが衰退する一方、夫婦・親子などの家族関係が安定する。

○戦後家族モデルの形成期(1945~55、戦後復興期)と安定期(高度成長期、1955~73)

①戦後家族モデルの特徴

・家業の継続から「成長性」を前提とした家族へ

・アイデンティティの拠り所が「共同体」「天皇国家制」から家族へ

・「人並みの生活水準」の上昇と「家族の範囲」の縮小

生活水準の向上の指標である「住宅、家電製品、子どもの学歴」

・性役割分担「男は仕事、女は家事」の形成

経済的条件：家族収入の安定と増大を保障する高度成長

人口学的条件：きょうだい4人コーホート

法律的・政治的条件：1947年の民法改正による「イエ制度」の廃止。男女平等規定。会

社員家族の住居得優遇措置、税制における専業主婦世帯の優遇

社会意識の変化：「子どものため」イデオロギー、三歳児神話、愛情の役割分担(「男は仕事、女は家事」をすることがそれぞれ愛情表現とされるようになる。)

②戦後家族モデルの功罪

・社会的機能の充足＝「成長性」の達成

生活保護者数の低下、親の負担による労働力の高度化(進学率の上昇)

・個人的機能の充足＝「生きがい(アイデンティティ)」の獲得

離婚率の低下(1960年代、1.0%台)、非嫡出子出生率の低下(1980年代、0.8%)

嫁姑問題は生活水準の向上により深刻化せず

- ・戦後家族モデルの自己目的化

「標準的な形態の家族さえ保てば幸せがもたらされるはず」という神話、標準的家族形態から外されることへの差別意識がうまれる

- 戦後家族モデルの微修正期(石油危機ー低成長期ーバブル経済、1975~98)

- ・石油危機(1973)やニクソン・ショック(1971)などにより低成長期に入るが、欧米が被ったような深刻な不況・失業・若年の雇用状況の悪化などの変化を、日本は被らなかった。1990年代まで、経済の相対的好調、強い親子関係、配偶者特別控除・専業主婦年金負担免除などの政策により、戦後家族モデルは微修正に留まりながらも一定の機能を果たしていた。

- ・少子高齢化の開始点

専業主婦数のピークと減少(1975)、平均初婚年齢の上昇、合計特殊出生率の低下谷が浅くなる傾向にある「M字型就労」

- ・戦後家族モデルの基盤のゆらぎと微修正

男性被雇用者や自営業者の収入の伸び鈍化⇔「企業社会」の維持路線は変わらず貿易自由化の促進により農業経営や流通業のコストが増加→輸入制限、減反措置、大型店出店規制などにより自営業者家族の生活を維持する微修正

基本的な枠組みは維持するものの結果的に、世代内伸び鈍化、父親と比較した息子の収入水準の伸び鈍化が目立つことになる。

- ・戦後家族モデルにおける微修正

- ①妻のパート労働者化

「1975年から始まる助成のパート労働者化や未婚化は、マクロ的に見れば、フェミニズムの浸透のような主体的な意志で選び取られたものではなく、パート労働での共働きや未婚のままであることを強いられているという側面が強い。(p167)」自分が好きなことをやるために自ら選び取ったもの、として受容されたフリーターの議論と似ている。

- ②結婚の先送り

結婚したい、子どもをもちたいという意欲が落ちているわけではなく、戦後家族モデルが前提とする「成長性」が失われた結果、不安定雇用の拡大による将来見通し不透明感の結果でもある。結婚しない層は、不安定・低収入の男性、高収入の父親をもつ女性に多くなる。国際結婚の増加がみられるが、日本人男性=中国、タイ、フィリピン等の発展途上国女性、日本人女性=アメリカ、イギリス等の西欧諸国人というように、戦後家族モデルの基本的な枠組みは変わらない。

- ③「愛情と結婚の分離」

「家庭内別居」に象徴される戦略だが、生活の安定が保証されているからこそ実現できる形態でもある。

○戦後家族モデルの解体期(グローバル化とニューエコノミー、1998~現在)

・石油危機以後、欧米に広がったグローバル化、ニューエコノミーによる「個人化」「リスク化」「二極化」などが、日本では約20年遅れるかたちで1990年代から顕著になる。

・少子化と高齢化による生産年齢人口割合の減少

出生数は1973年の209万人を第2次ベビーブームに、2004年には111万人まで低下  
合計特殊出生率は1973年には2.14、2004年には1.29

平均寿命の伸びによる高齢化

→生産者(労働者+家事労働者)が生産する財やサービス ÷ 全国民(生産者+非生産者)  
分子が小さくなるのに対して分母が大きくなり、分け前が減る。さらに、すでに日本の  
高齢者の就労率は高いので、これ以上の労働力の創出は難しい。

・その他、様々な問題の噴出

自殺者数の飛躍的増大(1998、1万人近く増え3万人を越える)、大卒者就職率の急激な低下(1999)、失業率の増大(2000~、5%)、「できちゃった結婚」の増加、少年凶悪犯罪者数の増加

・問題の質的变化と「家族の二極化」

児童虐待相談数の激増(1999)→専業主婦の育児不安から、経済的困窮のなかの虐待へ  
「家庭内別居」から、経済的困窮による中年離婚へ

比較的豊かな家庭で起こる「神経症型」不登校から、豊かでない家族で起こる「脱落型」  
不登校へ

「ダグラス-有沢の法則」(高収入の夫=専業主婦、低収入の夫=働く妻)の不成立

→自己実現と子どもという指標に基づく「勝ち組家族」「勝ち負けの先送り家族」「負け  
組み家族」への分化がすすんでいることを指摘

・「自分らしさ」イデオロギー

役割負担を拒否する手段として「自分らしさ」を主張する傾向

・「着陸不安」(岩見和彦)

理想的な家族モデルを追求しようとすればするほど、未婚のままでいることが自己目的  
化する。「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」と同じロジックといえる。

・「ファンタジーの中の家族」(ホックシールド)

家族に備わるアイデンティティ供給機能や情緒的欲求を満たすものとして、ペット・新  
興宗教・メイドカフェなどが代替となっている。

○対策はあるのか？

・戦後家族モデルがなくなるわけではないが、維持は不可能

・男女共同参画、戦後家族モデルの優遇政策の廃止(政策単位の個人化)「のみ」では女性の  
非正規雇用の増大と、家族の二極化は止められない

・家族をもちたいという人が減ったわけではないという希望



#### ①若者の将来にわたる経済基盤の強化

- ・オランダの「短時間正社員」制度、イギリスの若者向け職業訓練プログラム

若年層の雇用不安による治安悪化は日本の場合、「パラサイト・シングル」というかたちで抑えられている。

#### ②社会制度から「漏れた」人々への支援プログラム

#### ③多元的で誰でも実現できる「家族モデル」の創造

- ・『21世紀家族へ』（落合恵美子、1994）、家族の戦後体制から21世紀家族へという「明るい展望」は、今となっては楽観的になってしまった？
- ・「使い捨てられた」弱者のあふれる社会は避けられないのか？

### 3、批判や評価など

- ・パラサイト・シングルの増大、晩婚化・未婚化などの原因を、本人の感情や戦略に帰するという側面を取り上げて、「パラサイトせざるをえないのは経済的に苦しいから」とする主に若年層からの批判
- ・それらの原因を、社会的経済的構造の変容に帰するという側面を取り上げて、「若者は甘えている、努力が足りない」というように自己責任論を展開した、戦後家族モデルを内面化した層からの批判

### 4、著者の現在の研究テーマ

#### ①家族の個人化の進展とその社会的影響に関する実証研究

#### ②未成年の喫煙防止に関する調査研究

その他：格差社会、恋愛、少子化、親同居未婚者、専業主夫に関する研究など

主要参考文献(2011年5月15日)

ウィキペディア(山田昌弘、パラサイト・シングル、結婚活動)

中央大学／山田昌弘研究室 <http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~m-yamada/index.html>

山田昌弘『迷走する家族』、有斐閣、2005。

〃『パラサイト・シングルの時代』、筑摩書房、1999。

〃『希望格差社会』、筑摩書房、2004。